



節目の年を迎えて

日産自動車株式会社
副会長

志賀 俊之

今年、日産がルノーと資本提携をして15年の節目の年を迎えました。提携当時、両社合わせて480万台だった販売台数は2013年には過去最高となる830万台まで増加し、世界第4位の自動車グループへと成長を遂げました。

ルノー・日産アライアンスは更なる発展をとげ、4月には研究・開発、生産技術・物流、購買、人事の機能を統合しました。これにより2016年までに少なくとも年間43億ユーロにのぼるシナジー効果創出を目指します。

一方、今年はブランド展開においても節目の1年となりました。ニッサン、インフィニティに続く第3のブランドとして「ダットサン」の展開が海外で本格的に始まりました。すでに販売が開始されているインド、インドネシア、ロシアに続き、南アフリカでも販売が予定されています。

日本市場に目を向けると、2013年12月にはルノー・日産アライアンスが新たに共同開発したコモン・モジュール・ファミリー(CMF)をベースとした初のモデルである新型「エクストレイル」が発売となりました。

CMFはアライアンスが独自に開発したモジュールアーキテクチャーのシステムであり、シナジーを増大させるものです。2013年から2020年の間に段階的に、ルノーと日産の車種への適用を拡大していきます。

さらに今年2月には、三菱自動車との合弁会社であるNMKVを通して企画・開発をした軽自動車第2弾「デイズ ルークス」を発売しました。おかげさまでお客さまからは昨年6月に発売した第1弾「デイズ」とともに大変好評を頂いております。

また、同じく2月には「ティアナ」、「スカイライン」といった主力セダン2車種を全面刷新しました。

中でも今回13代目となる新型「スカイライン」は日産80年の歴史の中で最も長くお客さまに愛されてきたブランドです。そして、スカイラインの歴代モデルには、日産が持つ最新の技術が余すことなくつぎ込まれてきたこともスカイラインの伝統と言えます。

今回の新型でも、ステアリングの動きを電気信号に置き換えてタイヤを操舵する「ダイレクト・アダプティブ・ステアリング」を世界で初めて実用化するとともに、様々



ダットサン「GO」



スカイライン

な新技術を盛り込みました。

この新しいステアリングシステムはこれまでにない運転体験をお客さまにご提供するとともに、現在研究開発が進む自動運転の分野においても重要な役割を担っています。

交通事故の9割は人間の運転ミスが原因と言われています。持続可能なクルマ社会の実現に向けて日産が掲げているビジョン「ゼロ・フェイタリティ(死亡事故ゼロ)」の達成を目指す上で、自動運転技術には大きな期待が寄せられています。今回この技術が市場投入されたことで、今後より一層技術が磨かれていくものと考えています。

日産はこうした自動運転に繋がる技術を段階的に投入しており、今年7月には2020年までの商品化に向けた具体的なスケジュールを発表しました。今後もこの分野で業界をリードしていきます。

もう1つのビジョンである「ゼロ・エミッション(排出ガスゼロ)」の領域においても取り組みは着実に進んでおります。

2010年12月に発売した「日産リーフ」はグローバルで累計13万5千台を販売し(2014年8月末時点)、現在世界で最も売れている電気自動車(EV)となっています。

今年6月には第2弾となる「e-NV200」を発表致しました。このクルマは多目的商用バン「NV200パネット」をベースに、e-パワートレインを組み合わせた日産EV初の商用車です。これにより、お客さまのビジネス

に新しい価値をご提供できると確信しております。

EVは排気ガスを出さないだけでなく、エネルギー管理の点からも昨今注目が高まっています。搭載されている大容量リチウムイオンバッテリーの蓄電池としての可能性は広がりを見せており、住宅だけでなく、ビルなどの商業施設、災害対策の一環としても注目が高まっています。

さらには太陽光、風力、水力といった自然エネルギーを活用したスマートコミュニティの実現に向けた大規模な実証実験も世界各地で行われており、ここでもEVは重要な役割を担っています。

このようにクルマは単なる移動手段としてだけでなく、大きな可能性を秘めています。

これからもクルマが多くの人に必要とされ、生活を豊かにするパートナーとして愛され続けるべく、日産は2つの「ゼロ」実現に向け、引き続き様々な取り組みを行ってまいります。

今後も日産に是非ご期待ください。



e-NV200